

【収藏品紹介】
『華』（大阪園芸会、明治40年創刊）②

『華』は、明治40年に大阪園芸会によって創刊された園芸雑誌です。前号（2020年12月号）に続き、さいたま市大宮盆栽美術館の収藏品を通して、『華』と大阪園芸会について紹介します。

『華』の内容は、盆栽を含めた園芸全般の培養管理の技術的な記事から、盆栽道や園芸に関する論説、「盆栽文学」や随想、質問や投書、「雅界時報」（情報欄）といった多彩な誌面で構成されています。このうち注目すべき記事として、明治41年8月号（第2年第8巻）の「三樹園盆栽談」があげられます。これは大阪盆栽界の草分けの一人である三樹園が、大阪発祥とされる「文人盆栽」などの歴史を語ったものですが、岩佐亮「盆栽文化史」（一九七六）でも取り上げられているように、幕末・明治の盆栽史を語る上で必読の資料です。

三樹園は大阪における「文人盆栽」の

本家「草楽園」で修業し、文人木の指導者であったとされていますが、『華』には三樹園が制作した文人木の写真が掲載されており、当時大阪で隆盛した文人木の姿を知ることが出来ます（画像①）。



画像① 三樹園の陳列風景[松と霊壁石]
（『華』第2年第1巻、明治41年1月）

される梅丈園の盆栽も確認でき、当時の整姿のあり方などが窺い知れます（画像②）。なお、梅丈園には茶室があり、定期陳列会の報告記事などからも席飾りに趣向を凝らしていた様子がわかります。ところで、明治40年に発会した大阪園芸会ですが、同42年11月に発起人が減少し、翌月には会の事務所と発行兼編集者が梅丈園に変更しています（第3年第12巻）。このことについて『華』誌上では「本会は従来其仮事務所を高津吉助園内に設けありしが、

また、三樹園と同じく大阪盆栽界の草分けで、針金掛けの「創業者」として「針金撓（ため）右衛門」の異名があったと

一古園松井吉助園は事情ありて今回其事業を廃して園を閉じた」とされ、同園の管理者であった中川喜三郎が「名園の

廃絶」を惜しみ、吉助園の事業を継承して、「市外萩の茶屋」付近に「中川富貴園」を開園したとされています。江戸時代から続く「古園」吉助園の廃業については、これまで明治末年とされてきましたが、より具体的には明治42年12月頃であったことがわかります。

この点と関わって、同じく明治43年1月号の「投書」欄には、「大阪の盆栽界、巖樹園・赤松園を失ひ、今亦有名の元老盆栽家小林園、吾盆栽界を脱す、何となく物淋しき感あり」と、当時、発会時の発起人であった巖樹園・赤松園・小林園も廃業していたことがわかります。また、他の投書では「一般の不景気に連れ、大火後の盆栽界、茲兩三年前に比して甚だ振はざるの感あり、

大阪園芸会の「幹事」

（明治43年10月（休刊）時点）

一樹園	大阪市北区梅田
梅丈園	大阪市北区老松町
中川富貴園	南海電車萩之茶屋停留所南
三樹園	大阪市北区野崎町
翠香園	大阪市曾根崎上

※『華』第4年第10巻より。明治43年2月より「発起人」から「幹事」体制となった。

日本屈指の古園吉助は市外に隠れ、大阪吉助園の名亦聞くを得ず、次で盆栽界の

元老小林園を失ひ、赤松・巖樹・梅市・三湖等しく華雑誌発起者の名を削られる、大阪盆栽界の為めうたゝ感なきを得ず」とあり、梅市園や三湖園といった発起人たちも廃業していたことがわかります。吉助園をはじめとして、この時期に大阪の盆栽園が次々と廃業していった背景



画像② 梅丈園の陳列風景[松]
（『華』第2年第1巻、明治41年1月）

については、右の投書から、当時の不景気と、明治42年7月に大阪市北区で発生し、焼失戸数が1万戸を越えた「北の大火」の影響が窺えますが、この点は今後より詳細に検討していく必要があります。さて、明治42年末の組織改変後、同43年2月には会の規定を改正し、会の目的

や事業も大幅に簡素化されました（第4年第2巻）。『華』の終刊時期は不明ですが、明治43年10月号（第4年第10巻）では、来たる11・12月の2か月間の休刊が通知されています。この理由には、①やむを得ない事情により、事務所を梅丈園から他に移転する必要が生じたこと、②「会費」の整理に時間を要すること、③記者の増加や誌面の改良など「会務」の「反転」のための準備を要すること、があげられています。

当館では、これ以降の『華』を収蔵しておらず、また国会図書館等でも確認できません。現段階の推測となりますが、明治42年末以降の組織改変（規模縮小）の流れを考慮すれば、休刊のまま自然消滅に近い形で終刊となった可能性が高いと思います。創刊まもなくの間に盆栽園が相次いで廃業するなど、明治末期の盆栽界を取り巻く社会状況を知るうえで『華』は格好の資料と言えるでしょう。

（当館学芸員 林進一郎）